

---

# デビエン

AYAMI

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

デビエン

### 【Nコード】

N9081B

### 【作者名】

AYAMI

### 【あらすじ】

天使と悪魔の話で、主人公は親友が天使であることを知ってしまう。知られると親友はこの世から消えてしまうらしい。主人公は親友を守るため悪魔と契約をするが……。

## 第一章

『皆、どこへ行くの？私を一人にしないで…』

「夢……。ハァ…」

コンコン。

「はい、どうぞ」

「失礼します」

ボタン。

「おはようございます、奈美さん。また、人間界にいた頃の夢を見たようですね？」

「ええ、まあ」

「過去のことは早くお忘れになって下さい。あなたは人間ではないのですから」

この奈美と呼ばれている女は十年前まで人間界で暮らしていた。人間とは、どちらかという仲間が良かった。しかし、人間達は彼女に不思議な能力があると分かると不気味がり、彼女の側へやらなくなった。そして奈美の能力を見た天界のものは彼女にある呪文を唱えさせた。

【偽りに隠されし真の姿を現せ】

この呪文はじぶんの本来の姿が分かるというものである。すると、奈美の背中に白い大きな羽が生え、奈美が天使であることが分かり、天使として天界で暮らすようになった。

「ハァ」

奈美はいつもの様にため息をつき窓から見える景色を眺めていた。ガサガサ。

「コンチワ。これから俺と遊ばない？」

外の木から、男が奈美の部屋へと入ってきてそう言った。

「あなたは？」

「俺？光一。お前を素敵な場所につれてってやるよ」

「行けない。執事に怒られるから」

「大丈夫だって。暇なんだろう？」

そう言うのと呪文を唱えた。

「着いたぜ。綺麗だろ？」

見たこともない花が咲いている。

「綺麗。初めて見るわ」

「そうなんだ。…そういえば君の名前は？」

「奈美よ」

「へえー。いい名前だな」

奈美と光一はその日から執事の目を盗んでは会うようになった。そして、いつしか二人はお互いに愛し合うようになっていた。

コンコン。

「奈美さん、入りますよ」

カチャ。

「奈美さん！！…これは！？」

執事が見つけたものは真っ黒な羽だった。そこに帰ってきた奈美が入ってきた。

「！！」

「奈美さん！これはどういうことですか！」

黒い羽を片手に執事は奈美につめよる。

「それは…」

「私があまかったようですね…」

執事は奈美に手をかざすと呪文を唱えた。

「ーっ」

（体が…動けない…。光一、助けて）

「奈美！」

二人の前に光一が現れた。光一は奈美を動けるようにすると、奈美をつれて飛び立った。

「もう大丈夫だよ、奈美。バリアもはってあるから、誰も入って来れない。これからここで俺と暮らそう」

たどり着いた場所はいつもの花畑だった。

「うん」

こうして二人は、この花畑で暮らすようになった。

半年後……

二人には双子の姉妹ができた。

双子の姉妹はそれぞれ銀と青の羽が生えていた。姉妹は二人の愛情をたくさん受け、すくすくと育っていた。

そんなある日……

「ママ、遊んでくるね」

「いってらっしゃい」

奈美達はいつもの様に楽しい日常を過ごそうとしていた。

「ここだな」

天使らしき者が奈美達の家の前にいる。

「そのようです」

そう言うとき奈美達の家に火をつけた。中には、奈美と光一がいる。家はいつきに火の海になっていた。奈美と光一の悲鳴は家が燃え尽きる頃には消えていた。

「！？ママ、パパ！！」遊び終えて帰ってきた幼い姉妹がみたものは無惨にもやけ焦げてなくなっている自分達の家と一つの塊となった自分達の大好きな両親だった。

「……」

二人は無言で湖へと向かった。

そして湖へつくと二人は手を握り合い身をなげた。  
―生まれ変わっても、ずっと一緒だよ―

## 第二章

「おはようございます、光先輩！」

学校の敷地内に入って早々、いつものように後輩が声をかけてくる。

「おはよう」

「キャー！光先輩と挨拶しちゃった〜」

笑って挨拶を返すと、その子は何か言いながら走って行ってしまふ。

「おはよう、光！今日もモテモテ君だね」

「君じゃない！！いつも言ってるだろ！俺は女なの！」

親友の奈津は朝から失礼な事を言ってくる。言い返しても大して気にした様子もなく、

「あ、そうだ光、今日空いてる？」

と唐突に聞いてくる。

「今日は全然OK：っておい！人の話を無視するな！」

答えたあとで、俺は自分の話が流されたことに気づいた。

「じゃあ、七時半にいつもの公園ね！」

（また、無視かよ…。まあ、いいや）

「分かった。次、移動だよ」

「本当だ。急ごう！」

朝から教室移動があることを思い出し、二人は急いで走っていく。

キーコンカーコン……。授業終了のチャイムが鳴り、皆、帰り支度を始める。

「バイバイ、光。約束忘れるなよ」

奈津はそれだけ言うのと、もう背を向けて歩き出していた。

「分かってるよ」

遠ざかる背中に向かって声をかけるが、その声が奈津の耳に届いたかは分からない。聞こえていなかったとしても、いつもと同じ会話なのだから特に困ることはないだろう。

「ただいま」

「おかえり。これから私は仕事にいくから」

義母の返事はつめたい。自然と光の言葉もつめたくなる。

「いつてらっしゃい」

彼女は光の顔を見ることもせず、出ていった。

ボタン。

玄関のドアが閉まる硬質な音を聞きながら、光は自室へ向かった。

「はぁ…」

自分の部屋に入った光は、ため息をつきながらベッドに横になり眠りについた。

ピピピピ…

目覚ましの音が次第に大きくなり、目を覚ます。

「…七時二十分か…」

時計を見て眩き、光は体を起こす。

簡単に着替えを済ませ、キッチンに義母へ宛てた置き手紙を残して光は家を出た。

街に出ると、まだ七時すぎだというのに人通りが少ない。時間を気にしながら光は急ぎ足で公園に向かう。

五分ぐらいして公園に着いたが、まだ奈津は来ていないみたいだ。

だだ、薄暗い街灯がともっている。

そろそろ、半になるというのに奈津が来る気配がない。周りに目をやりながら、ふっと上を向くと何かがこちらに向かって降りてくるのが見えた。だんだん、その何かの形がはっきりしてきて、それが

人だと分かった。

「え……、奈津……」

何かは、真っ白い羽を生やした奈津だった。

羽が消え、奈津が辺りを見回すのが見え、光は慌てて近くの植木の後ろに隠れた。

（奈、奈津に羽！？）

動揺して叫びそうになるのを必死で耐え、光は考える。

これは夢なのだろうか、いや、夢だ。奈津が空から降りてくるなんて有り得ない。

でも…。

そう考えている内に奈津がやって来ていた。

「何やってるの、そんな所で？」

奈津は木陰に隠れている光を見つけてそう言った。

「うおおお！？」

後ろから声をかけられ、驚いて大きな声を出してしまう。

「何もそこまで驚かなくてもいいじゃん！光の声の方がビックリするよ！」

心臓の辺りを押さえた奈津が怒ったように言ってくると光は小さく謝る。

「ご、ごめん」

「てか、何で隠れてるの？」

その言葉に光は視線をそらして曖昧に答える。

「あー…何でもないよ」

「そう。…じゃあ、行こうか」

奈津はそれ以上追及しなかった。

光達は公園から出て、食事をする場所を探して街を歩く。

「どこで食べる？」

「…」

光は考え事をしているのか、応えない。

「ねえ、光ってば！聞いている！」



「あ：うん、うん、聞いてるよ。俺はどこでもいいよ」

光の相変わらずの曖昧な返答にも気分を害した様子もなく、ここにしようと、奈津はいつもの店に決めた。

明るい奈津の声に頷き、光は奈津と一緒に飲食店の扉をくぐる。

食事中も光はうわの空で、奈津の話も心ここにあらずといった感じの返事しかなかった。

「美味しかったね」

「ああ」

「じゃあ、また明日ね！」

挨拶を交わして奈津と別れた光は来たときと同じように公園を通って帰ろうとしていると、突然、光の前に真っ黒な羽を生やした同い年ぐらいの少女が現れた。

「ねえ、あんた見たんでしょう？」

「あんたは？」

いきなりそう言われ戸惑いながらも、その少女に問う。

聞くと、少女は自慢気に笑った。

「私は悪魔の楠。この綺麗な黒い羽を見れば分かるでしょ。あんたは確か光ね」

“ナン”と名乗った少女は一度視線を外し、再び光を見て笑う。

「どうして俺の名前を……っか、あんたが俺に何の用だ？」

光は訳が分からないまま楠に言った。

「私には何でも分かるのよ。フッフ……。ところで奈津に羽があるのを見たのよね？」

「それが何だ」

睨みつけてくる光を見て笑っていた楠はいくらか真剣な面持ちで光の問いに答えてやる。

「まず、あんたの親友、奈津は天使なの。奈津達天使はね、羽があるところを見られる……つまり正体がバレたら、天界でも人間界でも居なかった存在になる。消えてしまうのよ」

「そんな!？」

反射的に光は叫ぶ。

楠は光に見られないように笑みをこぼす。

「……なんとかならないのか……？」

先刻とはうってかわって弱々しい光に楠は笑みを消し、冷たい声で言う。

「それは光、あんたが悪魔になれば、この楠様が奈津を助けてあげるわ」

「……分かった」

迷うような沈黙の後、光はあまり感情のこもらない声でそう呟いた。

「俺が悪魔になれば奈津を助けてくれるんだな？……でも、どうして俺を？」

「それは、あんたに素質があるからよ」

楠は意外にあっさりと答えた。隠す必要はないのだろうか。

「だけど、あんたも物好きね」

理解不能とでも言いたげに肩をすくめる。

光は弾かれたように顔を上げ、怒った口調で言う。

「奈津は俺の大事な友達だ。それに、俺が何しようとあんたには関係ない」

楠はムツとして言い返しかけるが、かろうじて理性がそれを押さえ込む。

「そうね、私には関係ないわ。本当にこれでいいのね」

「ああ」

光は迷うことなく頷いた。

「契約成立ね」

楠は目を閉じ、光に向かって腕を伸ばす。手のひらを光に向け、光の額の辺りに手をかざす。

「喚魔覚醒。光の中で眠りし力、目覚めよ」

「……っ!？」

光を黒い闇が包み、思わず目をつぶる。

「これであんたは私達の仲間よ。言っとくけど契約を破れば死が待

っているわ。それと、あんたの呪文は【魔力覚醒我が秘めたる力、目覚めよ】よ。それじゃ」

楠は一通り説明すると用は済んだとばかりに空へと昇っていった。もう。

光は少しの間、動けずにいた。

少しして、誰もいない家に帰ってきた光は、よほど疲れていたらしくベッドに入るとそのまま眠ってしまった。

### 第三章

ピピピピピ：

目覚まし時計のアラームで音で目を覚ました光は学校へ行く準備をする。

「いってきます」

“義母が返事をしてくれる”などという希望を持っているわけではないが、習慣になってしまっている光は小さめの声で言ってしまう。

「いってらっしゃい」

予想に反して見送りの声がするが、考え事していた光はもう一度言い返すこともないまま、家を出る。

「光！！おはよう」

元気な声と共に、肩に衝撃がくる。

「おはよう奈津」

振り返って挨拶を返すと、いきなり名前をよばれ光は驚いて、

「え、何！？」

と叫び返す。

すると奈津は突然笑い出し、またしても光は驚くハメになる。

「な、なんだよ！？」

「だ、だって靴」

腹をかかえ、腰を折る奈津が、苦しそうに笑いながら言う。

「え？靴！？」

「だんちだよ」

訳がわからず慌てていると、奈津にそう指摘され、視線を下におろす。

「……あ、本当だ。…良かった…」

（「俺のことバレたのかと思った…」）

「何が良かったのよ？」光の胸の内など知るはずもない奈津は首をかしげた。

あれから数日が過ぎたある日……

「おはよう光！」

いつもの様に明るい声がして、光はいつもの様に明るい声がして、光はいつもの様に応えようと奈津のほうを振り返った。

「おは……」

それ以上、続ける事ができなかった。

「うっ……」

口許を押さえる光に奈津は駆け寄った。

「光、大丈夫！？」

「ごめん。先行って」それだけ言って、光はトイレに走った。

（「……内臓出そう」）

「うゝ」

光が苦しんでいると楠がトイレの窓から顔を覗かせ、

「あら、早いわねえ」

場にそぐわない明るい声でそう言った。

「楠！？」

睨んでくる光の目など気にした様子もなく、楠は窓に腰かける。

「あんたに羽が生えるのよ。楽しみだわ」

フフと笑う。

「何でお前が！」

「仕事よ。仕事」

「仕事？」

「そうよ」

いぶかしげに自分を見る光に楠は笑みを浮かべて秘密を告白するよう  
に囁く。

「今日はあのえーらい御方に奈津を殺せって言われたからきたのよ」  
その言葉に光が息を呑む。

「忙しいから行くわね。じゃあ〜」

笑い声を残して楠は行ってしまった。

（奈津が……殺される）光は急いで奈津の元へ行こうとしたが、思  
うように体が動かない。

「……」

よろけて壁にぶつかる。光はそのまま壁をつたって、やっこの思い  
で奈津の元へたどり着いた。

「光！！！」

奈津の声に顔を上げると、そこには奈津と楠が対峙していた。

「奈津……、それに皆」奈津達の後ろには眠らされているクラスメ  
イト達がいた。

「あら、光、私の手助けに来てくれたの」

わざとらしい嬉しそうな口調で光に話かける。

「誰がお前なんかを！！！」

敵意をむき出しにする光に、芝居がかった仕草で楠は泣く。

口許の笑みは消さないまま。

「あらやだ、裏切るのね光ちゃん〜」

「ごちゃごちゃ、うっさい！！！」

怒鳴られ、楠は怒りで顔を赤く染める。

「何ですって！！！」

ヒステリックに叫び、手を振り上げると、それを止めるかのように  
空から女が降りてきた。

楠の倍程もある、黒い大きな羽だ。

「ざくら様!!」

楠はその女に駆け寄り慌てて膝元にしゃがみこむ。

「…お前が光だな。楠にわび、このまま悪魔になると誓うのなら、先刻の無礼は許してやろう。さあ、どうする…?」

ざくらと呼ばれた女は、ひどく冷たい瞳をしていた。

「俺は悪魔なんかにならない。奈津を殺すっていうなら、俺はお前らをぶっ倒す!」

光の答えにざくらは笑みを浮かべながら言った。

「そうか…それがお前の答えか」

「ああ」

「楠、二人まとめてやってしまえ」

ざくらに命じられ楠は嬉しそうにうなづく。

「分かりました、ざくら様」

言って、使い慣れた黒いカマを構える。

「奈津、一緒に戦おう」

「うん」

二人は同時に別の呪文を唱える。

「闇より生まれし悪しき者、我が力で浄化せん」

「魔力覚醒。我が秘めたる力、目覚めよ…う、っ…」

今度は先程とは違う感じが光を襲った。

(…背中が…熱い…っ)

自分の体に腕をまわし、訳の分からない感覚に耐える。その横で奈津も同じように苦しみだしていた。

「う、あ、ああ…!」

「ああ…」

叫び終わる頃には、二人の背中にあの銀と青の羽が生えていた。その羽はとても大きく輝いていた。その様子を目の当たりにしたざくらは驚きを隠せなかった。

「な…っ!」

そこへ、天使の中でも位の高い沙羅が光と奈津の前に現れた。

## 第四章

「あなた達が奈美と光一の子供だったのね」

光と奈津は訳が分からないというような表情を見せた。

「何も分からないよね。：仕方ないわ。あなた達は天使の奈美と悪魔の光一の子供。奈美と光一は愛しあっていた。けど、天界や魔界の者達が許すはずがなかった。だから奈美と光一は見つからないように二人で暮らし始めたわ。半年後、二人には双子の姉妹ができた。その姉妹には銀と青の羽が生えていた」

「銀と青!？」

「そうよ。それから奈美達家族は仲良く暮らしていたわ。でも、奈美と光一は天界の者達に消された。二人の子供はその場にいなかったから消されずにすんだけど、二人は両親のあとをおって自ら命を絶った。その事を知った天界の者達はかわいそうに思い、姉のほうを人間として、妹のほうを天使として転生させた。それがあなた達よ」

「お喋りはおしまいだ!」

ざくらはそう言って光達に迫ってくる。

「奈津!」

「うん!」

呪文を唱える二人。

「貴様…っ…!?!」

「ぐああああ…!!!!」

ざくら達は悲鳴と同時に消えていった。

「やった…!!!!」

奈津と光が喜ぶ中、沙羅が言う。

「：私達は青い羽を持つ光の方が悪魔だとばかり思っていました。：でも本当は銀の羽を持つ奈津、あなただったのですね」

奈津は驚く様子もなく平然とした口調で言う。

「さすが沙羅様」

「奈津!?!」

呆然と立ち尽くす光に沙羅は剣を渡す。

「これで奈津を。奈津はもうすぐ誰にもとめられない悪魔になってしまうのです。その前に」

「…お願い光…私を殺して…」

涙をながしながら光にしがみつく奈津。

「訳わかんねえよ! 正気かよ!」

光は奈津の肩を揺らす。

「うゝゝ、いやあああ…」

奈津は突然叫びだす。

「奈津!!」

「ハア、ハア…ひ、光、お願い…殺して…」奈津の目からは大粒の涙がこぼれ落ちている。

「…分かった…」

光は剣を手にとる。

奈津は目を瞑った。

「わー!!」

叫びながら奈津の心臓へと剣を向けた。  
グサッ。

「…光…ありがとう…」

奈津の体からは黒い液体が出ていた。  
そして闇と共に消えていった。

「奈津ー!!」

光の声は奈津に届くことはなかった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9081b/>

---

デビエン

2011年1月15日20時52分発行